

ベルクソンにおける持続しているものの实在

野瀬 彰子

序

『意識に直接与えられるものについての試論』（以下、『試論』と略す）で示される持続についての理論がベルクソン哲学の出発点だということは、多くの先行研究によって認められてきたし、ベルクソン自身も言及していることである¹。持続についての理論から、『物質と記憶』では直観（l'intuition）についての理論が、『創造的進化』では生命（la Vie）についての理論が派生してくる。ベルクソンは、われわれが知性によって通常認識するものだけでなく、知性によっては認識できない持続しているものが存在することを示し、持続しているものについての知を直観と呼ぶ。さらに、生命についての理論は、持続しているものの直観に基づく方法によって構築されるのである²。

とはいえ、『試論』では、持続していないものだけでなく持続しているものも存在するということが示されているにすぎない。持続しているものは持続していないものと同等のものとして存在すると考えられている。それでは次の二点が理解できない。まず、何故ベルクソンは知性よりも直観を重要視するのか。次いで、何故ベルクソンは直観に基づく方法を用いるのか。本稿では、『物質と記憶』からベルクソンが持続しているものを「实在するもの（le réel）」（MM 205）と呼ぶことに注目し、その意味を解明することで、これらの問いに答える。『物質と記憶』においてベルクソンは、持続していないものだけでなく持続しているものも存在するのみならず、持続していないものではなく持続しているものが实在すると述べるのである。存在するものという語は、単に思い浮かべられるだけのものも含む、外延の広い概念である。それに対して、实在するものは単に思い浮かべられるだけのものを含まない。持続しているものを实在するものと呼ぶのは、持続しているものが持続していないものに比べ優位なものだと考えているからである。そして、持続しているものが实在するものだからこそ、ベルクソンは持続しているものの知である直観を重要視する。さらに、直観が实在するものの知だからこそ、直観に基づく方法を用いるのである。

本稿では、ベルクソンが持続しているものをいかなる意味で实在するものと呼

んでいるのかを、『試論』から『物質と記憶』までのベルクソン哲学の発展を考慮に入れつつ、明らかにすることを目指す。そのために、まず第1節では、『試論』においてベルクソンが、いかにして、持続と空間との本性の相違を示し、持続しているものの存在を提示するのかを明らかにする。だが、持続と空間との本性の相違のみでは、持続しているものの実在を説明できない。そこで、第2節では、ベルクソンが『物質と記憶』で、自我だけでなく物質に関しても、持続しているものが、持続の分割により得られる要素に先行して在り、かつそうした要素の根底に在るということを示して、二元説の問題を解決しようとしており、それに応じて実在するものについての理論を変化させていることを確認する。とはいえ、先行性と根底性のみによっても持続しているものの実在を説明できていない。第3節で示すように、絶対的なものと相対的なものとの区別から持続しているものの実在を説明できる。さらに、本稿では、ベルクソンがいかなるものを絶対的なものと呼びいかなるものを相対的なものと呼ぶかを検討することを通して、『物質と記憶』においてベルクソンがいかなる意味で持続しているものを実在するものと呼ぶのかを明らかにする。

1. 本性の相違のある二項の存在

1. 1 持続しているものの存在

ベルクソンが持続しているものの存在を提示するのは、空間中に認識される外的事物と同じ類のもののみでは説明できないことが、われわれの実際に経験しているものなかにあるからである。それは、例えば、或るメロディーをわれわれが聴き取ることに関して確認できる (cf. DI 75, 77, 78)。ベルクソンはメロディーの知が外的事物と同じ類のもののみから説明できないことを示し、外的事物と本性の相違のあるものがメロディーの知には入り込んでいるということを示すのである。外的事物は、時間が経ってもそれ自体別のもに变化せず「固定されている」(cf. DI 96, 97, etc.)「自己同一的」(DI 71, 79, 81, etc.)なもので、かつ互いに判明に区別される「相互外在的」(DI 71, 73, 79-80, etc.)なものである。そして、数えられるものである以上、いくらか「等質的」(DI 70-4, 78, etc.)なものである。仮に、外的事物と同じ類のもののみからメロディーの知が構成されるとすると、われわれがメロディーの最後の音を聴いている時には当の最後の音の知しかないことになる。だが、実際には、われわれは、諸々の音が継起していくのを聴いた上でメロディーの最後の音を聴いている時に、或る独特な「効果」(cf. DI 79)を

受け取っている。外的事物と同じ類のもののみからメロディーの知が構成されると考えると、こうした効果を説明できなくなってしまうのである³。メロディーの知の独特な効果を説明するためには、メロディーの知に、外的事物とは対立する性格をもつものが入り込んでいると考えねばならない。すなわち、メロディーの知には、「絶えず変化」(cf. DI 99) していて、かつ諸要素が「相互浸透」(cf. DI 75, 77, 78, etc.) していて、数えられない「互いに異質的」(cf. DI 72-3, 81-2, 95) なものが入り込んでいるのである。これらの性格をもつものをベルクソンは持続しているものと呼ぶ。こうして、外的事物と持続しているものとの本性の相違、そして持続しているものの存在が示される⁴。

ただし、厳密に言えば、『試論』では、持続していないものだけでなく持続しているものも存在するということが示されているにすぎない。確かに、あらゆるものを持続していないものと見做す立場を批判するために、持続していないものだけでなく持続しているものも存在すると述べるのは有効である。しかし、『物質と記憶』においては、持続していないものではなく持続しているものが実在するということが示されている。『試論』によれば持続しているものは持続していないものと同等のものとして存在するにすぎないが、『物質と記憶』によれば持続しているもののほうが持続していないものに比べて優位なものとして存在するのである。

1. 2 『試論』における実在するもの

とはいえ、確かに、『試論』でもベルクソンは「実在するもの (le réel)」(DI 82) に言及している。ただし、『試論』で実在するものと呼ばれるのは、空間の一切入り込んでいない持続たる「純粹持続」(DI 74, 78) と「持続なしの空間」(DI 82) たる純粹空間である。持続しているもののうちでは純粹持続のみが実在するものと呼ばれるのであり、メロディーの知といった限定された期間のみ持続しているものは実在するものとは呼ばれない。それに加えて、純粹持続だけでなく純粹空間も実在するものと呼ばれている。それゆえ、持続していないものでなく持続しているものが実在するということが示されているわけではないのである。

ところで、ベルクソンが『試論』で純粹持続と純粹空間とを実在するものと呼ぶのは、持続と空間との混合から成るものを出発点にして思考すると、自由の問題 (cf. DI VII, 110, 180) を解き難いものにしてしまうからである。ベルクソンは、持続しているものの存在とともに、われわれの自我が自由であることを示す。というのも、持続しているものは、必然的な法則に従う外的事物とは本性の相違をもつ。それゆえ、持続しているものがわれわれの自我の内にあるということは、

われわれの自我が自由であることを含意しているのである⁵。しかも、ベルクソンは、われわれの自我の自由が、理念としてあるわけではなく、事実としてであると述べている (cf. DI 145)。ベルクソンが自我の自由を事実と述べるのは、持続しているものがわれわれの経験に確かに入り込んでおり、それは人間誰もがもつメロディーの知や一分間の知の内であり、例外的なものではないからである。これに対して、持続と空間との混合から成るものを出発点とし、自我と外的事物とのあいだに本性の相違がないと思ひ込むと、自我も外的事物と同様に必然的な法則に従っているかのように考えられ、自我が自由をもたないと結論づけることになる。事実上われわれの自我は自由であるのに、自我の自由を認められなくなって、自由が在るのか否かという問題を解き難いものにしてしまうのである。

確かに、われわれの通常経験や思考において、持続と空間とは常に混合している。ベルクソンは、この混合を持続と空間との「内方浸透現象 (une *phénomène d'endosmose*)」(DI 81, 83, 164, 171) と呼ぶ。純粹持続と純粹空間は、通常それとしては認識されていない。メロディーの知には持続しているものが入り込んでいるが、それでもメロディーの内には相互外在的な諸々の音の知が含み込まれている。反対に、全く等質的な要素から構成されているように思われる「数 (*nombre*)」(cf. DI 56-63)⁶の認識でさえ、持続が入り込んでいなければ成り立たない。われわれの通常認識しているものは、持続と空間との混合から成るものである。

しかし、持続と空間との混合から成るものを出発点にして思考し、自我と外的事物とのあいだに程度の差違しかないと考えると、自由の問題を解き難いものにしてしまう。そこで、ベルクソンは『試論』で一貫して、自我を外的事物と同類と見做せないということを示している。『試論』第1章では、自我の諸状態のあいだに「強度 (*l'intensité*)」(DI 2, 3, 4, 169, etc.) のような外的事物のあいだにあると同様の量の差違しかないと見做す考えを批判する。『試論』第2章では、自我の変化を「等質的時間 (*le temps homogène*)」(DI 81, 90, 93, 99, 178) において思考することを批判する。そうして、自我と外的事物とのあいだに程度の差違しかないと考えるのは誤りであり、われわれの通常認識しているものが持続と空間との混合から成る見かけ上のものにすぎないということを示しているのである。ベルクソンは、持続と空間との混合から成るものではなく、純粹持続と純粹空間を出発点とする。純粹持続と純粹空間とがわれわれの通常認識しているものの源にあり、それら二項の混合から全てが成り立っていると考えれば、自由の問題を解決できるようになる。というのも、自我と外的事物とのあいだに本性の相違があり、自我が自由だと認めることができるようになるからである。こうして、われわれの

通常認識しているものの源にある純粹持続と純粹空間こそ実在するものだとベルクソンは考えるのである。

しかし、『試論』における実在するものについてのこうした理論は、別の解き難い問題を生じさせる。『試論』においてベルクソンは、純粹持続を自我に割り当て、純粹空間を外的事物に割り当てる。だが、外的事物に割り当てられる純粹空間が、いかにしてわれわれの自我に入り込み、われわれの通常の認識の源の一方となっているのか。こうした問題は、結局のところ、『物質と記憶』でベルクソンが解決しようとする「二元説の問題 (le problème du dualisme)」(MM 203) と同じものである。二元説の問題とは、われわれの精神と物質とのあいだに本性の相違があるのだとしたら、われわれの身体や物質についてのわれわれの認識において、精神と物質とがいかに合一或いは一致しているのかという問題である⁷。

2. 持続の階層性

2. 1 持続しているものの先行性と根底性

以上で示したように、持続と空間との本性の相違のみから考えると、純粹持続と純粹空間とが等しく実在すると捉えられることになる。だが、『試論』においてベルクソンが、持続しているものと持続していないものとが同等のものとして存在するのではなく、持続しているもののほうが持続していないものよりも優位なものとして存在すると述べている箇所もある。『試論』においてベルクソンは、自我の内にあるものに関しては、持続しているものが持続していないものに先行して在り、かつ持続しているものが持続していないものの根底に在ることを示しているのである。このことは、『試論』第2章終盤で、持続していないものから構成される「表層的自我」と、持続している「深層的自我」(DI 93) という二つの側面がわれわれの自我にあり、それらの二側面が「たった一つの同じ自我」(DI 93) のものだという記述から引き出すことができる。

持続しているものが持続していないものに先行して在ること、すなわち持続しているものの先行性に関しては、先述したメロディーの知の例から次のように説明できる。ベルクソンは、メロディーの知を持続していないもののみから再構成できないからこそ、持続していないものだけでなく持続しているものが存在していると述べるのであった。とはいえ、ベルクソンは、メロディーの知が持続しているもののみから成ると述べているわけでもない。メロディーの知には、持続している側面だけでなく、互いに区別される様々な音の知が含み込まれている。深

層的自我と表層的自我が一つの同じ自我の二側面であるのと同様に、メロディーの知という一つの事柄に関して持続している側面と持続していない側面の両方がある。持続していないものから持続しているものが構成されるのではないとしたら、持続しているものが先行して在り持続していないもののほうが後からつくり出される他ない。かくして、持続しているものが持続していないものに先行して在ると考えられるのである。

だがそれだけでなく、持続しているものは、持続していないものがつくり出された後にも、持続していないものの根底に在る。そのことを本稿では持続しているものの根底性と呼ぶ。根底性についてもメロディーの知から説明できる。仮に、或るメロディーの一部が音階上「同じ」音の反復から成ると考えてみよう。その場合、三回聴こえるその音は、たとえ音階上「同じ」だとしても、それぞれ異なる「色合い」(cf. DI 6, 27, 30) 或いは異なる「ニュアンス」(cf. DI 6, 29, 31) を帯びている。それらの音の知がそれぞれ帯びている色合いの違いを説明するには、諸々の音の知がメロディーの知からつくり出された後にもなお、根底に持続しているものとしてメロディーの知が在ると考えねばならない。かくして、持続しているものの根底性が確認される。『試論』第2章でベルクソンは深層的自我のことを「根底的自我」(DI 96, 125) と言い換えている。それは、諸々の音の知の根底にメロディーの知が在ると同様に、表層的自我がつくり出された後にもその根底に深層的自我が在ることを意味している。

こうして、持続しているものの先行性と根底性から、一見、持続しているものの実在を説明できるかに思われる⁸。『物質と記憶』第4章においてベルクソンは、われわれの通常認識するものが、持続しているものを分割して得られる「要素」(MM 204) でしかないと述べ、分割される前の持続しているものを「実在するもの」(MM 205) と呼ぶ。こうした記述は、持続しているものの先行性と根底性によって、持続しているものの実在を説明しているかのように思われる。

さらに、『物質と記憶』第4章の中盤部分では、自我或いはむしろ精神のみでなくわれわれの認識する物質の根底にも持続しているものが在ることが示される⁹。そうすることで、「二者択一」(cf. MM 53) 的な二項から成る本性の相違が精神と物質とのあいだになく、精神と物質との合一或いは一致を妨げるものがないことを示すのである。かくして、持続しているものの先行性と根底性によって、『試論』においては解けなかった二元説の問題が解消されるかのように議論が提示されている。

2. 2 持続の階層と実在性

しかし、実のところ、先行性と根底性のみによっては、持続しているものの実在を説明できない。なぜなら、以下で示すように、先行性と根底性は、持続の分割により得られる要素と持続しているものとのあいだだけでなく、様々な程度の持続しているものあいだにもあるからである。

前項では、持続の分割により得られる要素と持続しているものとの関係を、表層的自我と深層的自我との関係と同様のものと考えた。しかし、厳密には、メロディーのような限定された期間持続しているものと深層的自我とは別のものである。深層的自我は、自我が発生した時から現在まで絶えず持続している、いわば自我全体の持続である。限定された期間持続しているものと自我全体の持続とを区別すると、限定された期間持続しているものに対して自我全体の持続も先行性と根底性をもつと考えられる。持続しているものが持続の分割により得られる要素に先行して在りかつ件の要素の根底に在るのと同様に、自我全体の持続は、メロディーの知のような限定された期間持続しているものに先立って在り、こうした持続しているものの根底に在るのである。そうだとすると、仮に先行性と根底性を理由として自我全体の持続を実在するものとするならば、限定された期間持続しているものはそれに対して実在しないかのように思えてしまう。

さらに、『創造的進化』においてベルクソンは、自我全体の持続よりもさらに先行して在り、かつ自我全体の持続よりもいっそう根底に在るものとして、生物進化を生じさせてきた「生命の流れ (courant de vie)」(EC 26)、いわば生命の持続を提示する。仮に生命の持続のほうが先行して在りかつ根底に在るという理由で実在すると考えられるならば、今度は、限定された期間持続しているものだけでなく自我全体の持続さえもそれに対して実在しないかのように思えてしまう。

以上のように、先行性と根底性は、持続の分割により得られる要素と持続しているものとのあいだだけでなく、様々な程度の持続のあいだにある。それゆえ、先行性と根底性によって、持続しているものの実在を説明できないのである。

3. 持続しているものの実在

3. 1 持続しているものの絶対性

持続と空間との本性の相違のみによっても、先行性と根底性のみによっても、持続しているものの実在を説明できない。そこで、以上とは異なる議論から持続しているものの実在について考えてみよう。持続しているものの実在を考える上

で避けて通れないのは、絶対的なもの (l'absolu) と相対的なもの (le relatif) との区別である。なぜなら、ベルクソンは「形而上学序説」(『思考と動くもの』所収) において、「絶対的なもの」(PM 177, 178, 179, etc.) の知としての「直観」(cf. PM 181, 182, 185) と「相対的なもの」(PM 178, 179, etc.) の知としての「分析」(PM 181, 182, 187, etc.) とを明確に区別し、直観される持続しているものを「実在するもの」(PM 182) と呼んでいるからである¹⁰。

分析が相対的なものの知とされるのは、分析が「ひとが身を置いているところの視点と、ひとがそれによって自らの認識するものを表現するところの諸々の記号とに、依存している」(PM 178) からである。例えば、或る対象の空間中での運動は、われわれがどの視点から当の運動を知覚するかに応じて、またはいかなる記号に基づいて運動を表すかに応じて、多様な仕方で認識される(cf. PM 178)。さらに、われわれは或る一定の視点を採らなければ対象の空間中での運動を認識できないし、「座標軸」や「基準点」(PM 178) といった何らかの記号を用いなければ対象の空間中での運動を認識することができない。分析によって認識されるものは、或る一定の視点を採ったり或る特定の記号を用いたりしなければ無くなるものであり、或る特定の見方に相対的なものである。

これに対して、直観されるものが絶対的なものと呼ばれるのは、「いかなる視点も採らず、いかなる記号も拠りどころとしない」(PM 178) でわれわれがそれを知っているからである。「形而上学序説」では、運動している対象に「共感」(PM 178) し、運動を「対象そのものの内から」(PM 178) 捉えることが、対象の運動を直観することだと述べられる。確かに、対象そのものの内から捉えるならば、対象をどの視点から知覚するかも、運動をいかなる記号によって認識するかも関係ない。だが、本質的なのは、対象に共感することでいかなる視点も記号も必要なくなるということではなく、直観されているのがいわば内面的な質の変化だということである。というのも、『物質と記憶』でもベルクソンは或る対象の運動についての知を例に挙げて絶対的なものと相対的なものについて論じているが、その際「絶対的」(MM 219) なものと呼ばれるのは当の運動を見ている者の内面的な「状態或いは質の変化」(MM 219) である。『物質と記憶』では、運動している対象に共感することは含意されていないが、或る対象の運動を見ている際にわれわれの内面に生じる質の変化こそが絶対的なものだと述べられている点は「形而上学序説」と共通しているのである。内面的な質の変化とは、われわれが自らの外に認識するものとは異なる性格をもつ持続しているものである。運動している対象に共感するか否かにかかわらず、内面的な質の変化は視点や記号なしに知

られている。それゆえ、直観されるもの、すなわち持続しているものが、絶対的なものと呼ばれるのである。

絶対的なものと相対的なものとの区別は、確かに、『物質と記憶』ではまとまった形で説明されていない。だが、実在するものについての理論の根本的な変化は1889年の『試論』と1896年の『物質と記憶』との間に生じており、『物質と記憶』と1903年の「形而上学序説」との間には根本的な変化はない。『試論』では、純粋持続だけでなく純粋空間も実在するものと呼ばれる。それに対して、『物質と記憶』では、「形而上学序説」と同じように、持続しているものが実在するものと呼ばれる。それゆえ、「形而上学序説」だけでなく、『物質と記憶』に関しても、絶対的なものと相対的なものとの区別から持続しているものの実在について論じることは可能である。

ただし、持続しているものがいかなる程度のもので実在するというを示すには、持続しているものがいかなる意味で絶対的なものと呼ばれるのかをいっそう精確に捉え直さねばならない。先述したように、「形而上学序説」においてベルクソンは分析をわれわれの或る特定の見方に相対的なものの知と規定する。われわれが分析によって認識しているものは、それを認識するための或る特定の見方を止めると同時に無くなる。だが、持続しているものも、われわれが注意を向けるのを止めると、無くなってしまふかのように一見思われる。例えば、われわれは、或るメロディーが確かに聴こえていても、別のものに注意を向けることがある。とりわけ、やるべき行為がある時には、聴こえているメロディーを無視して当の行為に没頭する。だからこそ、『試論』でベルクソンが批判する立場のように、全てが持続していないものから構成されると思ひ込む立場が生じる。だが、実のところ、持続しているものは、われわれの見方に応じて無くなってしまふわけではない。再びメロディーの知の例から考えよう。或る音の知がなければ、その音が内に含み込まれているところのメロディーの知は別のものになってしまう。それと同様に、或る時に聴き取られる或るメロディーの知がなければ、自我全体の持続も別のものになってしまう。それは、当のメロディーの知が、われわれがそれに注意を向けていない時にも無くなっておらず、自我全体の持続の内に含み込まれているからである。いっそう程度の低い持続に注意を向けている時にも、いっそう高度な持続がその根底に在る。それだけでなく、仮にいっそう高度な持続に注意を向けている時があるとしても、いっそう程度の低い持続が当の持続の内に含み込まれていて無くならないのである。持続しているものは、いかなる程度のもので、われわれがそれに注意を向けていない時にも無くならず、われわ

れの見方に相対的なものではない。すなわち、持続しているものは絶対的なものなのである。

ところで、以上のように持続しているものの絶対性を理解し、その上で持続の階層性を考慮に入れると、持続の分割により得られる要素も絶対的なものだと考えられる。持続の分割により得られる要素と限定された期間持続しているもの、自我全体の持続、さらには生命の持続が、連続的な階層を成しているのだとしたら、限定された期間持続しているものが自我全体の持続に含み込まれているのと同じように、持続の分割により得られる要素も、それが分割されてくるところの持続の内に含み込まれていて、われわれがそれに注意を向けていない時にさえも無くならないことになる。持続の分割により得られる要素も、相対的なものではなく、絶対的なものなのである。そして、持続の分割により得られる要素も、一見持続していないように思えても、持続の内に含み込まれている以上、程度は低いが実は持続していると考えられる。

かくして、絶対的なものと相対的なものとの区別から、持続しているものがいかなる程度のものであっても絶対的なものだということが説明できる。そして、われわれがそれに注意を向けているか否かにかかわらず存在する絶対的なものであるという意味において、ベルクソンは持続しているものを実在するものと呼ぶのである。先行性と根底性のみでは持続しているものの実在を説明できないのであった。絶対的なものと相対的なものとの区別によってこそ、持続しているものが実在するものだということが説明できるのである。

3. 2 等質空間の相対性

さらに、絶対的なものと相対的なものとの区別から、『物質と記憶』においてベルクソンが「等質空間」(MM 235-8, 247)を「単に思い浮かべられるだけのもの」(MM 235)と呼んでいる理由も説明できる。『物質と記憶』によれば、持続しているものが絶対的なものである一方で、等質空間は相対的なものなのである。そして、等質空間がいかなる意味で相対的なものと規定されるのかということから、持続しているものの絶対性に説明を加えることができる。

等質空間が相対的なものとされる理由は、等質空間がいかにして作り出されるのかを『物質と記憶』の記述から再構成すれば明らかになる。『物質と記憶』では、質と量とのあいだに「緊張 (tension)」(MM 203, 232, 249)すなわち持続の程度の差違があることが示されて質と量との対立が解消されるだけでなく、空間中になように思われる感覚と空間中の対象についての知覚とのあいだに「拡がり

(extension)」（MM 203, 248）の程度の差違があることが示され非延長的なものとの延長的なものとの対立が解消される（cf. MM 203）。このようにして、二者択一的な二項から成る二元説が退けられ、二元説の問題が解決されるのである¹¹。感覚から知覚までのあいだに空間化が生じているように思われるのだから、感覚から知覚までの程度の差違の基準となる拡がりからこそ、等質空間は作り出されると考えられる。ただし、拡がりというのは持続するはたらきのいわば否定にすぎない¹²。しかも、『物質と記憶』において拡がりとは、実際にあるはたらきではなく、二元説の問題の解決のために想定されるものでしかない。『物質と記憶』第1章でベルクソンは、強さの増大に応じた知覚から感覚（或いは情感）への移行を事実として認めているのに対して、感覚から知覚への移行を積極的に論じていない（cf. MM 52-4）。さらに、『物質と記憶』第4章によれば、われわれの認識する物質の根底に在る持続しているものに記憶力がはたらきかけることによって感覚質が成り立っているが（cf. MM 227-8）、記憶力の入り込んでいるところの感覚質しかわれわれの意識には現れないし、感覚質から記憶力を取り除くなどということは事実上あり得ない。感覚から知覚へと向かうはたらきなどというものは実際には無いのである。拡がりという語は、感覚どうし、または感覚と知覚とを比べる際に想定される感覚の弱さ或いは記憶力の弱さでしかない。それは、感覚の強さ或いは記憶力のはたらきの裏に想定される、いわば記憶力の否定、結局のところ持続の否定でしかないのである。等質空間が相対的なのは、等質空間がこうした持続の否定たる拡がりを抽象化したものにすぎないからである。ベルクソンは、等質空間を「固定と分割の二重の仕事を抽象的な仕方で表しているもの」（MM 237）、或いは「固定性と無限分割可能性の象徴」（MM 244）と呼ぶ。持続しているものとは対立する性格、すなわち固定性と無限分割可能性、さらには相互外在性と等質性といった性格をまとめた観念が等質空間なのである。等質空間は、持続の否定たる拡がりを抽象化したものにすぎないのだから、われわれがそれを思い浮かべなくなったら、現れなくなるだけでなく、全く存在しなくなる。等質空間はわれわれがそれを思い浮かべている時にしか存在しないのである。

等質空間のこうした相対性と対比すると、持続しているものの絶対性について説明を加えることができる。持続しているものは何かの否定ではない。それゆえ、たとえわれわれがそれに注意を向けるのを止め、それがわれわれに現れなくなっても、なお存在している。持続しているものは、われわれが注意を向けているか否かにかかわらず、いかなる時にも存在するという意味において実在するものなのである。

結び

以上の議論を振り返ろう。『試論』においてベルクソンは、時間と空間という本性の相違のある二項を発見し、持続していないものだけでなく持続しているものも存在することを明らかにする。だが、『試論』ではベルクソンは、純粹持続と純粹空間を実在するものと呼び、純粹持続を自我に、純粹空間を外的事物に割り当てる。そうすると、二元説の問題を解くことができなくなってしまう。さらに、持続と空間との本性の相違のみからは、持続しているものが実在するものだという説明できない。

そこで、ベルクソンは、『試論』で自我に関して示された持続しているものの先行性及び根底性を、『物質と記憶』ではわれわれの認識する物質に関しても見出し、二元説の問題を解決しようとする。だが、先行性と根底性のみからも、持続しているものの実在を説明できない。

絶対的なものと相対的なものとの区別によってこそ、持続しているものの実在を説明できる。相対的なものとは、持続の否定を抽象化したものにすぎず、われわれがそれを思い浮かべている時にしか存在しない、等質空間である。それに対して、持続しているものは、われわれが注意を向けるか否かにかかわらずいかなる時にも存在している絶対的なものであるという意味において実在するものなのである。

そして、持続しているものが実在するものだからこそ、ベルクソンは、知性ではなく、持続しているものの知たる直観を重要視する。ただし、ベルクソンは、直観だけで実在するものの全てを知ることができると述べるわけではない。最も先行して在りかつ最も根底に在り、それゆえにいつそう高度なものである生命の持続をわれわれが見て取ることはない。われわれが見て取ることができるのは、メロディーの知のような限定された期間持続しているものとその分割により得られる要素、最も高度なものでも自我全体の持続である。それでも、いかに程度の低い持続であっても、われわれの見方に相対的なものではなく、絶対的なものである。われわれがそれに注意を向けている時にしか存在しないのではなく、いかなる時にも存在しているものなのである。それゆえ、実在するものたる持続しているものを手がかりにすれば生命についていくらか探究することができる。これが、ベルクソンが持続しているものの直観に基づく方法によって生命の探究を行う理由である。

¹ バルクソンは、ヘフディングへの手紙で、直観についての理論が持続についての理論から派生したものだと述べている (cf. ÉP 456)。Cf. Deleuze (2008, 1-2)。

² 拙論 (2018) を参照。

³ バルクソンは、メロディーの知の例のみから持続しているものの存在を説明しているわけではない。『試論』第2章では、振り子が六十回揺れたのを見て一分間経ったのを私が覚知する際に、われわれが持続しているものの知を有していることが述べられている (cf. DI 78)。この持続しているものの知を本稿では一分間の知と呼ぶ。それだけでなく、『試論』第1章で、われわれの自我の変化を量の変化として説明できないことを論じている箇所でも、自我の変化を持続しているものとしてわれわれが知っていることが示されている。

⁴ 持続と空間との混合から成るものを考察の出発点とすると解けない問題をつくり出してしまうがゆえに、バルクソンは持続と空間との区別から出発するということは、Le Roy が早い時期に指摘しているが、Deleuze が『バルクソニズム』第1章で述べたこととしてよく知られている (Deleuze 2008, 7-22)。Deleuze と同じように持続と空間との区別を強調するのは、例えば、Philonenko と Worms である。とりわけ、Worms (2004, 30) は、Deleuze (2008, 9) と同じように、『試論』における持続と空間との区別を強調し、純粹持続と純粹空間とを実在するものと呼んでいる。しかし、以下、本文でも述べるように、『試論』における実在についての理論にとどまっていたは、『物質と記憶』からバルクソンが、持続しているものを実在するものと呼び、持続しているものの直観を強調する理由が分からなくなってしまう。

⁵ 持続が自由を含意していることは、『試論』から一貫してバルクソンが述べていることである。われわれの意識が持続していることによって成り立つ自由に、「非決定的自由」と「自己決定的自由」という二つの意味の自由が含まれていることは、先行研究によって既に示されている (cf. Jankélévitch 2011, 77-9, 杉山 2006, 11, 30-6)。

⁶ 『試論』の結論においてバルクソンは、数を数えるという空間に関わる事柄においても持続が入り込んでおり、われわれは「時間を空間のなかにおいている」(DI 171) と述べている。

⁷ 『物質と記憶』第4章でバルクソンが注目しているのは、厳密に言えば、われわれの身体において精神と物質という本性の相違のある二項がいかにか合一しているかという問題である (cf. MM 200-1)。しかし、『物質と記憶』第1章においてバルクソンは、知覚 (精神) と物質のあいだに予め区別があることを前提としてから両者の一致を問題とする点に関して実在論 (réalisme) と観念論 (idéisme) とを批判する。『物質と記憶』第1章においても、精神と物質との本性の相違とそれらの二項が一つのものを成立させるということとのあいだに生じる二元説の問題を扱っていると考えられる。

⁸ 持続しているものが持続していないものに対して優位な存在であることを、持続しているものの先行性や根底性によって説明しようとする先行研究もいくつかある。例えば、Husson (1947, 2-4) は、『物質と記憶』第4章の冒頭部分を参照しながら、持続していないものの認識が実在するものを切り分けることによってつくり出されるものにすぎないことに注目している。

Robinet (1965, 10-2) も、持続しているものが持続していないものに先行していることに言及している。Jankélévitch が知性による持続していないものの認識を「回顧的錯覚」(Jankélévitch 2008, 21) と呼ぶのは、持続しているものが持続していないものに先行して在り、持続していないものは持続しているものを回顧的に認識することでつくり出される見かけ上のものにすぎないと考えているからである。しかし、本稿で示すように、持続しているものの先行性と根底性だけでは、持続しているものの実在を説明できない。

⁹ 拙論 (2019) を参照。

¹⁰ 絶対的なものと相対的なものとの区別から、持続しているものの実在や知性に対する直観の優位を説明しようとする先行研究もあり、この指摘自体には本稿も賛成している (cf. Riquier 2009, 76-87)。とはいえ、Riquier は、持続しているものが絶対的なものである理由に関しては、われわれがそれを内面から直観によって知っているからだとしか述べていない (cf. Riquier 2009, 76, 84)。Riquier は、持続しているものがいかなるものかではなく、直観という知り方から、持続しているものを絶対的なものと呼んでいるのである。しかし、それでは持続しているものが直観されるものである理由が説明されていない。直観されているから絶対的なものなのではな

く、本稿で示すように、持続しているものだから絶対的なものであり、持続しているものは知性によって認識されないからこそ直観されるのである。

¹¹ ベルクソンは『物質と記憶』で、二者択一的な二項から成る二元説を退けるだけでなく、新たな二元説を提示する。それは、「時間的区別」(MM 249)される二項である記憶力と知覚から成る二元説である。記憶力と知覚とのあいだには、本性の相違があると同時に、二項の「合一」(MM 250)が成り立つ。それゆえ、記憶力と知覚との二元説においては二元説の問題が解決されているのである。だが、二種の記憶力(cf. MM 31)と「純粹知覚」(cf. MM 31, 248)とのあいだに、いかなる本性の相違があり、かついかなる合一が成り立っているのかについては、別の機会に詳しく論じたい。

¹² 拡がりを持続の否定と位置づけることができる点に注目するのは、拡がりと同様に、持続或いは「緊張」(EC 62, 224, 246, etc.)の「否定」(EC 209)と規定されるものが、『創造的進化』で提示されているからである。それが「弛緩(détente)」(EC 202, 203, 213, etc.)である。『創造的進化』によれば、「肯定的実在」(EC 211)とは持続するはたらきであり、等質空間とその中に表象される物質的諸要素はそのはたらきを「中断或いは反転」(cf. EC 209, 211, 218)させるだけで「自動的に」(EC 211, 218, 221)生じる。空間と物質的諸要素は、持続するはたらきを否定或いは中断するだけで何も新しいものが付け加わることなく生じるのだから、それ単独ではあり得ないのである。ただし、『物質と記憶』で拡がりには既に発生させられた様々な持続のあいだの程度の差違として想定されるものだが、『創造的進化』でベルクソンはいっそう高度な持続からいっそう程度の低い持続を発生させるはたらきとして弛緩を提示している。拡がりとは弛緩との区別については別の機会に詳しく論じる必要がある。

[文献表]

1. 一次文献

ベルクソンの著作に関しては下記の略号を用い引用または参照箇所を指示する。

DI : *Essais sur les données immédiates de la conscience*, Puf, 2011[1889].

MM : *Matière et Mémoire*, Puf, 2008[1896].

EC : *L'évolution créatrice*, Puf, 2009[1907].

PM : *La pensée et le mouvant*, Puf, 2013[1934].

ÉP : *Écrits et paroles*, tome troisième, R.M. Mossé Bastide (ed.), Puf, 1959.

2. 二次文献

Deleuze, Gilles. 1998[1966]. *Le bergsonisme*, Puf.

Jankélévitch, Vladimir. 2011[1959]. *Henri Bergson*, Puf.

Husson, Léon. 1947. *L'intellectualisme de Bergson, genèse et développement de la notion bergsonienne d'intuition*, Puf.

Le Roy, Édouard. 1914. *Une philosophie nouvelle. Henri Bergson*, Félix Alcan.

Philonenko, Alexis. 1994. *Bergson ou de la philosophie comme science rigoureuse*, Cerf.

Riquier, Camille. 2009. *Archéologie de Bergson. Temps et métaphysique*, Puf.

Robinet, André. 1965. *Bergson ou les métamorphoses de la durée*, Seghers.

Thibaudet, Albert. 1923. *Le bergsonisme*, Gallimard.

Worms, Frédéric. 2004. *Bergson ou les deux sens de la vie*, Puf.

杉山直樹. 2006. 『ベルクソン 聴診する経験論』, 創文社.

野瀬彰子. 2018. 「ベルクソンにおける〈生命〉探究の方法の発展」, 『フランス哲学・思想研究』, 日仏哲学会, 第23号, 235-46.

———. 2019. 「ベルクソン『物質と記憶』における直観と方法」, 『論集』, 東京大学哲学研究室編, 第37号, 133-46.